

令和 8 年度
水の週間記念作文集

静 岡 県



「水の日」及び「水の週間」について

暑い夏、八月は一年で水の使用量がもつとも増える月です。

その最初の日（八月一日）を、「水の日」、八月一日～七日を「水の週間」とすることが、昭和五十二年の閣議了解により定められました。今はあまり水に不自由を感じませんが、昔は渇水によって給水車が出動するなど、水資源開発や水を大切にすることは、私たちにとって非常に重要な課題でした。

水の日・水の週間には、水の貴重さや大切さを考えるための、様々な行事が行われています。

しかし今、気候変動や施設の老朽化など、いろいろな問題が私たちの水づかいに影響を及ぼそうとしています。雨が降り、それが川となり、地下水となり、海に流れ出て、それが蒸発してまた雨が降って・・・

「水循環」が健全であることで、水がめぐる先々で豊かなめぐみがもたらされます。平成二十六年には、その水循環全体をしっかりと守っていくために、「水循環基本法」が制定され、八月一日は法律で「水の日」となりました。

○ 知 事 賞

水は地球の宝物

みんなで取り組むいつも以上の節水

菊川市立堀之内小学校

三年 新井 夢菜

1

静岡県立浜松西高等学校中部

一年 縣 ひかる

3

○ 教 育 長 賞

「せぎれ」が教えてくれたこと

いのちをまもる 大切なダム

小さな手助け

節水の成果とこれから

静岡市立賤機南小学校

四年 田中 礼衣

5

静岡市立長田西小学校

二年 高田 悠莉乃

7

静岡市立大川中学校

三年 牧野 翔

9

浜松市立笠井中学校

二年 藤田 夏維

11

○ 私学協会理事長賞

水って大切なんだなあ。

プールがなくなる！？

「水の星」の未来を守る

豊かな自然を、つなぐバトン

富士市立富士第一小学校

三年 川田 和来

13

沼津市立大岡南小学校

六年 青木 玲

15

不二聖心女子学院中学校

二年 高橋 すみれ

17

東海大学付属静岡翔洋高等学校中部

一年 小長井 麗來

19

○ 入 賞

私達が「食べている」水

沼津市立門池中学校

二年 佐々木 菜結華

21

水の週間記念作文コンクールについて

23

知事賞

水は地球の宝物

菊川市立堀之内小学校

三年 ^{あらい}新井 ^{ゆな}夢菜

「水をだしっぱなしにしないの！」

庭で水遊びをしていた時、お母さんの大きな声がひびきました。ビニールプールで遊んでいた私は、遊びに夢中になり、じゃぐちを止めるのを忘れてしまっていました。

「水はタダじゃないんだよ、もったいないでしょ。」

お母さんはそう言って怒ったけれど、その時の私は、（じゃぐちをひねればいくらでも出てくるのに、何がもったいないんだろう）と少しむっとしてしまいました。空からは雨がふってくるし、水がなくなるなんて考えられなかったからです。

でも、水の作文を書こうと、水について調べてみると、お母さんの言った「もったいない」の本当の意味がわかってきました。

一番おどろいたのは、地球にある水のほとんどが海の水で、そのままでは飲めないということです。私たちが使える川や湖の水は、地球全体のほんのわずかしかなりません。地球にあるすべての水をバケツ一杯だとすると、私たちが使えるのはたったのスプーン一杯分くらいなのだそうです。

私は今まで、「水のじゅんかん」があるから水はなくてはならないと思っていました。でも、あの日私が庭でむだにしまった水も、実は地球にとって大切な「宝物」だったのだと気づいて、心が重くなりました。

もし水が使えなくなったら、大好きなスイミングもできなくなってしまう。水の中では、地上ではできないことがたくさんできます。ぐるぐる回ってみたい、逆立ちをしてみたり、プカプカういて天井を見上げたり……。体全体が水に包まれる感じは、水の中しか味わえません。もし水が足りなくなったらプールがなくなったら、そんな楽しい時間も全部消えてしまいます。水は、生活を守るだけでなく、私に「楽しい思い出」をくれる大切な存在です。

世界には、きれいな水が飲めなくて、遠くまで水をとりに行かなければならない子どもたちもいるそうです。じゃぐちをひねれば水がでる今の生活は、当たり前ではなく、とてもめぐまれていることです。

だから私は、これから自分から水を守るための行動をしようと思いました。

まずは、庭で遊んだあとにじゃぐちがしまっているか「指さしかくにん」をすること。そして、歯みがきや顔を洗うときに水を出しっぱなしにしないことです。

朝、顔を洗うときのひんやりした気持ちよさ。スイミングの時間。そんな当たり前の幸せは、すべての水があるおかげです。

あの時感じた「むっ」とした気持ちは、もうありません。これからは地球の水を大切に使いながら、大好きなスイミングもがんばっていききたいです。

【審査員からの一言】

新井さん自身が水遊びやスイミングを楽しんでいる様子が生き生きと書かれていて、読んでいると自然と場面が浮かんできました。

水を守るための行動として挙げた「指さしかくにん」は、新井さんらしい提案だと思います。指さしかくにんや水を出しっぱなしにしないことで水を守り、これからもスイミングを頑張って欲しいです。

知事賞

みんなで取り組むいつも以上の節水

静岡県立浜松西高等学校中等部

一年^{あがた} 縣 ひかる

「間もなく静岡駅に到着」というアナウンスが流れた。その日、用事で静岡に向かっていた私は、降りる支度を整えながら窓の外の景色を見ていた。静岡駅に近づくにつれ、どんどん都会になっていく風景。安倍川に差し掛かり、いよいよ到着と思っていたその時、安倍川の変わり果てた姿に驚いた。安倍川がカラカラに干上がっていたのだ。水の流れらしきものは川の中央部に少しだけ確認できたが、およそ川とは言えないほどの水の量であった。浜松駅を出発してすぐに見える天竜川の水量も少なくなっていたが、安倍川ほどではなかった。これでは川ではなく、まるで枯山水で模した河原のようだ。今年の冬は全国的に雨が少なく、静岡県内も記録的少雨が続いていると聞いてはいたが、これほどの水不足とは知らず、大変ショックを受けた。今週の天気はずっと晴れ。来週も雨の気配はない。今後も晴れの日が続けば、ほとんどの川が干上がってしまうかもしれない。静岡県水資源課のホームページを調べると、天竜川水系では昨年の十二月から第二段階の取水制限が開始されており、いつも以上の節水を呼び掛けている。しかし、いつも以上に節水するにはどうすればよいのだろうか。

私は、小学校の頃から「水の作文」に応募していることもあって、普段から節水に取り組んでいる。具体的には、歯磨きの時や手洗いの時に水を出しっぱなし

にしないようにしている。水道のじゃ口をこまめに閉めることで水の無駄づかいを防いでいる。しかし、いつも以上の節水をするにはこれだけでは足りない。他の節水方法もあわせて行う必要がある。

浜松市のホームページを見ると、「シャワーの使用時間をいつもより一分短縮する。食器は水につけ置きしてから洗う。浴槽の残り湯は、洗濯、掃除、水まきなどに使う。洗車の際は、バケツにためた水で洗う。」などが節水方法の例として挙げられていた。この中でも私が取り組みやすいものはシャワー時間の短縮だ。それなら今日からでもできる。髪を洗う時は、まず髪を濡らし、風呂おけにお湯をはる。髪を洗っている時はシャワーを止める。そして、シャンプーを流す時は最初におけのお湯で流し、その後はできるだけ短くシャワーを使う。それを実践したら、どれぐらいシャワー時間を短縮できるか計ってみると、シャワーの使用時間は約二分短縮できた。この節水なら、「じゃ口をこまめに閉める節水」とあわせてできるため、いつも以上の節水が達成できるだろう。しかし、私一人が節水に取り組んでも意味がない。浜松市、いや静岡県に住むみんなが節水に取り組まなければ意味がない。そこで、まずは自分の家族に節水への協力を呼び掛けてみた。

祖父、祖母、父、母に今日見た安倍川の様子、静岡

県の少雨の状況、節水の必要性について説明したところ、皆快く協力を申し出てくれた。いつもの「じゃ口はこまめに閉める節水」に加え、祖父は庭木への水やりにお風呂の残り湯を使うこと、祖母は食器を水につけ置きしてから洗うこと、父は洗車にお風呂の残り湯とバケツにためた水を併用すること、母はお風呂の残り湯を洗濯に使うことで、いつも以上の節水に取り組んでくれることになった。これなら我が家だけでも、毎月百リットル以上の節水が達成できるだろう。

家族以外の人に節水への協力を要請することはなかなか難しい。しかし、親しい友人や先生に我が家での節水への取り組みを話せば、協力の輪は広がると思う。記録的少雨が毎年のように更新される昨今、節水はもはや必須である。私は、節水に取り組む環境づくりを静岡県全体に広めていこうと思う。

【審査員からの一言】

節水に対しての取り組みがとても具体的に記載されており、それぞれの場面が思い浮かぶ素晴らしい文章です。自治体のホームページを見るという調べ方も、地元に根ざした情報を取得する上でとても重要だと感じました。

縣さんが実践してきた節水の協力の輪が、さらに広がっていくことが楽しみです。

教育長賞

「せぎれ」が教えてくれたこと

静岡市立賤機南小学校

四年 ^{たなか}田中 ^{れい}礼衣

私は二月に、家族みんなで安倍川を歩いてわたりました。川が「せぎれ」で水が全く流れていなかったからです。ふだんは水が流れている場所を歩くのは、とてもふしぎな感じでした。

歩いていると、大きな流木を見つけました。さわってみたり、登ってみたりして、みんなでたくさん写真をとりました。川をわたった先では、とてもきれいな美和桜を見ることができました。この日は、今年の冬の一番の心にのこる思い出になりました。

でも、この「せぎれ」は、地球に大変なことが起きている合図だったのです。安倍川では、三十年に一度と言われるほど、雨がふらない日が続いていました。

愛知県では、ダムの水がなくなってしまう、みんなが節水しなければならなくなりました。

ここで質問です。地球にはたくさん水があると言われていますが、私達が飲める真水はどれくらいあるのでしょうか。

正解は、全体のたった約二・五%です。ほとんどが海水で真水は少ししかありません。雨が降らないと、私達が使える真水はどんどん少なくなってしまうのです。では、真水がなくなると、どんなことが起こるのでしょうか。

例えば、空気がかんそうして火事が起こりやすくなります。そして、火事が起きても火を消すことができ

ません。消防士をしているパパが、「消防車に海水を入れると機械がこわれてしまうんだよ」と教えてくれました。

また、お米や野菜も育てることができません。家庭菜園をしているママが「海水が入ると土や苗がだめになっちゃいますよ」と教えてくれました。

紙や服を作る工場でも、たくさんのお水が必要なんです。

そして何より、私達は水を飲まないと生きていきません。

人間の体は、約60%が水でできています。血えきのほとんども水でできていて、えいようやさんそを運んでくれます。もし水がなくなると、血えきがドロドロになり、体にも悪いえいきょうが出てしまいます。

お風呂や手あらいでも、もちろんお水は必要です。

このように、私達が生きていく中で、お水はとても大切なものです。

私はこの作文を書いて、楽しかった「せぎれ」は、地球からの大切な合図だったのだと考えさせられました。

今まで私は、水道からお水が出るのはあたり前だと思っていました。でも、それはあたり前ではありません。雨がふることは、ありがたいしぜんの恵みです。これからは、お水を大切にして生活していきたいです。

【審査員からの一言】

家族で安倍川を歩いた時の楽しい思い出から、水不足という話題への流れが新鮮でした。水不足になるとどうなるのか、家族と話した内容が具体的に書かれていてとても良かったです。

今後も様々な体験を重ね、水を大切に使う方法や取り組みについて、田中さんらしい提案をしてくれることを楽しみにしています。

教育長賞

いのちをまもる 大切なダム

静岡市立長田西小学校

二年 ^{たか} ^だ 高田 ^ゆ ^り ^の 悠莉乃

「ダムってなあに。」

わたしは、ニュースを見ていたお母さんにたずねた。すると、

「ダムっていうのはね、川をながれている水のりををちようせいしてくれるものなんだよ。今、いろいろな場しよにあるダムの水が足りなくなってしまうているんだよ。」

と教えてくれた。水のりををちようせいするってどういうことだろう。気になったわたしは、しらべてみることにした。

ダムには、大雨がふった時に川の水があふれないように川の水のりををちようせいする「ち水」というはたらきと、田んぼや畑に水をおくりとどけたり、生活するための水をよういしたりする「り水」というはたらきがあるということがわかった。そんなダムの水が、今、足りなくなってしまうているなんて。

もつとしらべていくと、ダムの水が足りなくなるのは、地きゆうおんだんかや水をつかうりようがかんけいしていることもわかった。ダムにためた水や、川をながれる水の力をつかって電気を作る「水力はつ電」は、何回でもくりかえしてつかえるさい生かのうエネルギーなんだって。ダムの水をふやすために、わたしにできることはなんだろう。

手をあらう時やおふろに入る時には、水を出しっぱ

なしにしない。トイレに入ったあとには、大小をつかい分けて水をながす。お父さんやお母さんにも教えてあげないと。

「あらいものをする時には、よごれをとってからあらってね。水のながしっぱなしもだめだよ。水を大切に。」

ダムの水がふえるように、地きゅうのみんなが水を大切にたつかつてくれるように、これからわたしにできることをつづきたい。

【審査員からの一言】

ダムについてとても詳しく調べられており、文章も丁寧に書かれていて、とても読みやすかったです。

水を大切に使うために高田さんが考えてくれたことを、お父さんお母さんなどと一緒に取り組んでいって欲しいです。そうすることで、新しい発見があり、もっと水を大切に使う、という気持ちになれると思います。

教育長賞

小さな手助け

静岡市立大川中学校

三年 ^{まきの}牧野 ^{かける}翔

僕は時間があるとすぐに川へ釣りに行きます。そのくらい釣りが好きです。狙う魚はヤマメやイワナで、どうやったら釣れるのか、どんな仕掛けがいいのか、そんなことをいつも考えていました。しかし、ほぼ毎日通っているのに、釣れるのは週に一匹ほどでした。お父さんや周りの大人たちは、「昔は今よりたくさん釣れた」とよく言います。そこで僕は、「じゃあ、なんで今は減ってしまったのか。」釣りが好きなので、そのことについてどうしても知りたくなりました。そのため僕は小学校の五年と六年の二年間をかけ、おおかわ学という学習を通して研究をしました。この研究の始めに立てた予想は三つあります。

一つ目は気候問題です。気温や水温の変化は、魚の生態に大きな影響を与えるからです。

二つ目は水の量が減少したことです。水が地面の下を流れる伏流水となってしまう、魚の住む場所が減ってしまったのではないかと考えたからです。しかし、これら二つの原因は僕一人の力では解決できないと考えました。

そこで、僕が目をつけたのは、三つ目の護岸によって川の流れが速くなってしまったことです。コンクリートの護岸によって直線的になった流れの勢いを、石などを置いてゆるやかにすることができれば、僕らの力でも魚が住みやすい環境を取り戻せるのではないかと

と考えました。

まずは、実験の許可をもらうために、静岡市役所の河川課へ連絡をしました。僕の提案を真剣に聞いてくれて、実験の許可をもらったときはとてもうれしかったです。

二〇二四年の六月から、いよいよ実験を開始しました。まずは、川に手を加えない状態でどれくらい魚がいるのかを確かめるために、魚の調査を行いました。手製の囲いを仕掛けて一週間後、期待をもってあけてみると、一匹のヨシノボリしかかかりませんでした。やはり、今のままの川では魚が住むのは難しいのだとはつきり分かりました。そのため僕は七月から九月の三か月間、川に石を置いて作った壁を十列作りました。台風などがきて、何度もなくずれてしまいました。あきらめずに直し、流れをゆるやかにし続けられました。

十月になり、石の壁を作った状態ではどれくらい魚がいるのかを確かめるため、同じ囲いを仕掛けて一週間後、おそろおそろあけてみると、そこにはなんとアブラハヤが十六匹、シマドジョウが二匹と計十八匹がかかりました。この結果から、僕は確かな自信をもつことができました。最初は一匹もいないのではないかとおそろおそろあけた囲いですが、これだけの命が僕の作った水場に集まってくれたからです。ただ川が干上がるのを見ているだけでなく、自ら考え行動して、

工夫をすれば、目の前の命を救うことができるのだと確信しました。

この経験を通して、環境を守ることは、他人事ではないと学びました。僕のような一人の小さな手助けでも、失われかけた命を繋ぐ力になりました。将来、僕は医師を目指したいと思っています。病気の人を救うことと、失われかけた川を救うことは、少し似ている気がしました。どちらとも助けを求める声に耳を傾け、あきらめずに最善を尽くすことが必要だからです。これから僕は、川を救ったときと同じように、失敗したときでも試行錯誤を重ね失敗を成功に変えていきます。そのくり返しが、将来の夢につながると信じています。

【審査員からの一言】

牧野さんの行動力に驚かされるとともに、地元が好きという気持ち伝わってくる良い文章でした。実際に行ったことやその結果が具体的に書かれており、とても面白く読むことができました。

このおかわ学で得た経験や結果が、牧野さん自身の夢や、他の川での参考になることを願っています。

教育長賞

節水の成果とこれから

浜松市立笠井中学校

二年 ^{ふじた}藤田 ^{かい}夏維

僕は朝起きたら、まず水を使って顔を洗う。その後水を流して用を足し、水道水を飲んで喉を潤す。これらの一連の動作には全て水が大いに関わっている。他にも、歯を磨くにも手を洗うにも風呂に入るにも、日常生活に限らずとも、何をするにも水を使い、水が大切になる場面は無数に存在する。これだけの説明で大切な事は明白だ。だが、日本人はそれを忘れている節があると思う。それは今の日本では蛇口を捻れば簡単に清潔な水が使い放題飲み放題で、あまりに人の生活に馴染みすぎているためだ。そのため、水の価値を履き違えてしまい、あつて当然、無いとおかしい。と考えてしまうことがある。

僕も、僕の家族もそう考えていた。ある日の朝、僕と姉と父は母親に詰められていた。きっかけは些細な事だった。僕達は洗面台で歯を磨き、その横で母親が洗濯機から洗濯物を取り出していた。僕が歯を磨いている時、急に母が僕の前で蛇口から流れていた水を手で止めた。思わず母の顔を見ると真顔で不機嫌そうな顔をしていた。姉と父と顔を見合わせると二人共、やってしまった、という顔をしていた。僕にも母が不機嫌な理由はわかっていて。最近、歯を磨く時や顔を洗う時、手を洗う時に水を出しっぱなしにしていたからだ。無論水が大切な事は理解している。だが、いつでも水が使えるため大切に思う気持ちが薄れて、い

いち蛇口の水を止めるのが面倒になっていた。その間、僕と家族の間に沈黙が流れた。その沈黙を破るように母が、「今日からみんなで協力して節水します。」と言いつ、僕はまあ良い機会かと思つて母の提案に賛成した。

その後、皆で節水のための術を話し合つたり、インターネットで調べたりして紙に書き留めた。そして、いつでも見られるように紙をリビングの壁に貼つた。そうして我が家の節水生活が始まつたが、節水の術は多く、最初は節水を忘れてリビングの壁の紙を見て思ひ出したり、家族に言われて思ひ出したりした。だが、二週間程このような生活をしていると、自然に節水する癖が付いていき、その癖に伴つて水を大切にしている気持ちも少しずつ芽生えていった。水を無駄にしていなという意識があるだけで日々の生活が少し楽しくなり、どの位節水できたのか、という気持ちも増えていき、胸が高鳴つた。

そして、節水生活を始めてから二ヶ月ほどたったある日、僕はソファ―に座つて各々好きな事をしていた。そこに母が来て皆に聞こえる声量で、「ここ二ヶ月の節約の成果を発表します。」と高らかに宣言した。僕は待ってましたと言わんばかりに、していることをやめ、母の方へ体を向けた。母は、「この二ヶ月で約六千円の節約に成功しました。」と満面の笑みで言つた。

僕は二か月間節約を頑張つた甲斐があつて嬉しい気持ちと、逆にそこまで節約が出来る程無駄に水を使つていたのかと驚く気持ちがあつた。なにはともあれ節水生活は成功に終わった。

この二ヶ月間の節水が役立つのは何も日常生活だけではない。近々来ると言われている南海トラフ巨大地震が起こつた時にも役立つ。大きな地震が起こつた際には水道管が破裂し、極度の水不足になる事があるそう、そのせいで風呂には入れない、トイレもできないなどの不便がある。実際に水を手に入れるために井戸から水を汲み上げる重労働を強いられた事例もある。そのため、日常生活以外でも節水を心がける必要があるように思える。

このように水は様々な場面で要となる物だ。今日の本ではありふれた物だが、決して無駄にしている物ではない。こうして水の事について深く考えていると、水を大切にしている気持ちが湧いてくる。

【審査員からの一言】

節水に取り組む家族の様子が藤田さんの視点で書かれており、楽しく読むことができました。具体的な数字で節水の効果も分かり、家族で節水してみようと思わせてくれる文章でした。

今回行った取り組みを継続するとともに、どのような節水を行ったのかを、周囲の方にもぜひ伝えていただきたいと思います。

私学協会理事長賞

水って大切なんだなあ。

富士市立富士第一小学校

三年 ^{かわだ}川田 ^{わく}和来

せかいの人ってたいへんだな。
お母さんが

「水を大切にしない。」

と言います。ぼくは、

「何で大切にしないと言うの。」

と聞きました。そしたら、お母さんは、

「もったいないでしょ。」

とだけ言いました。

ぼくは、その時思い出しました。ほいく園のころに、
せかいの子どもたちが学校へ行くよう子のドキュメン
タリーを見ました。アフリカの男の子が学校がおわつ
た後に、水をくみに行きました。そこは、家から遠い
場しよでどろがたまっていました。じゅうみんなといっ
しよに手やシャベルをつかってどろをほり、少し出て
きた水をバケツですくいました。そして、もときた道
をもどって家へ帰りました。

今考えると

「ぼくたちは、水道のせつびができているけどほかの
国は水道のせつびができていないんだなあ。」
と思います。

そこでぼくは、水道を大切にするには、どうしたら
いいか、考えました。

一つ目は、水道をつかえない人もいることをわすれ
ずに水道をつかう時は、ありがたいという気もちを

もってつかうことです。

二つ目は、ごはんをのこさず食べることです。ごはんをのこさないで食べるとおさらのよごれがへるからです。たとえば、お米をのこしたら米つぶがおわんにくっついてとれにくくなります。そうすると、スポンジでこすってもとれないので水のいきおいでよごれをとろうとして水をいっぱいつかうからです。

水がつかえない人がいっぱいこのよの中にはいるから、水をもっと大切にしよう。

【審査員からの一言】

保育園の頃に見たドキュメンタリーを思い出し、水道を大切にしようという川田さんの考えが素直に表現されていることがとても良いと思います。また、ご飯を残さず食べるという発想はとても独創的だと思いました。

川田さんが感じた水を大切にするという気持ちを忘れずに、もっと大切にする方法を考えて実践してみましよう。

私学協会理事長賞

プールがなくなる！？

沼津市立大岡南小学校

六年 ^{あ お き}青木 ^{れ い}玲

「バシャバシャ。」
私は水泳が大好きです。

でもこのまま水不足が続くと、プールが閉さされてしまうのです。

（えっ、何で？）

と思いました。なぜなら、プールは楽しいし、大好き！という人も私だけではないと思うからです。楽しい事が一つなくなってしまうなんてイヤではないですか。

そこで私はグーグルで調べてみることにしました。するとこんなことがわかりました。

「生活用水の確保を優先するため。」

確かに私達の生活には水がかかせないのでしかたがないかなと思いました。

さらに調べてみると、去年は水泳の授業が中止になってしまった学校や、市民プールが閉さされてしまったところもあったようです。

そのため私は、

（このまま何もしなくて、降水量も減ったら、私の住んでいるところでもプールが閉さされてしまうかもしれない。）

と、思いました。だから私は今まで以上に水を大切に使い、節水をしようと決意しました。

そこで、私にもできることは何だろうと考えてみました。

すると改善点を二つ見つけました。

まず一つ目は食器です。私はいつでも大きなお皿を使うことが多かったので、水をたくさん使って洗わなくてはいけませんでした。なので、これからは最低限の大きさのお皿を使うことにしようと思いました。

二つ目はシャワーを使う時です。私はシャンプーを使っている時でも水を出しっぱなしにしていたので、それを止めれば節水になると思いました。

この2つのことを意識するとどうなるのかグーグルで調べてみることにしました。

すると、一か月で三千リットルも節水できるということです。

ですが数字だけではどれぐらいか分からないなと思います、また調べてみました。

結果は一ぱんの浴そうの十五杯分も節水できるといいます。これを十年間続けると二十五メートルプールの水がたまるのです。気が遠くなりそうな話ですが家族三人でやれば三年と四か月でできますし、静岡県民でやれば八十七秒もの短い時間で水をためることがができます。さらに日本人全員でやれば、たった一秒で四百ものプールに水をためることが可能です。そうすると、水が足りなくなったり、プールが中止になることも減ると思います。

みんなで協力して節水しましょう。

【審査員からの一言】

日本人全員で節水すれば、一秒で四百のプールに水を貯められる、という事実に驚くと同時に、青木さんのプールが好きな気持ちが伝わってくる文章でした。数字が具体的に記されていることで、節水の効果が分かりやすいです。

プールの水が貯められるように、皆で節水できる取り組みを広げていってほしいと思います。

私学協会理事長賞

「水の星」の未来を守る

不二聖心女子学院中学校

二年 ^{たかはし}高橋 すみれ

私たちの住むこの地球は「水の星」と呼ばれている。宇宙では、水が液体の状態で存在すること自体が奇跡に近いそうだ。水の存在なしに生命は生まれず、存続もできなかつた。現に陸上で暮らす私たちの体内にも細胞を満たす水や血液という「海」が閉じ込められており、生命活動を支えている。水が安定して手に入られること、そしてその水を安心して使えること、この二つは生物、特に人間にとって生きるための必須条件なのだ。

にもかかわらず、私たち日本人、特に都会に住む者は、水の恩恵に感謝する機会が少ないように思う。家庭では電気やガス料金と比べると水道料金はとても安いし、レストランに入っても水は無料で提供されるのか普通だ。「水はあたり前にある」という状況で、水がなくなる、使えないという危機を私たちが感じることは少ない。私の周囲でも、災害時や雨が降らない渇水時には大騒ぎするが、喉元過ぎればすぐ感謝も危機感も忘れてしまう。私たちは目の前の水が本当に飲めるのかなどと考えもしない。水によって健康被害が出るなんて、遠い過去のこと、遠い国のことだと思っている。

そんなふうに水に無関心な人間の一人だった私が、水と人間との結びつきを考えるようになったきっかけは、海外でのボランティアの経験だった。一昨年カン

ボジアを訪れた私は、まず、滞在したホテルの水道水から下水道のような悪臭が漂っていることに驚いた。私にとって、それはとても口にできるものではなかった。水道水Ⅱ飲料水という日本の常識はそこには全くなかった。また、訪問先の小学校に隣接したスラム街では、低学年くらいの幼い子どもたちが、自分の顔よりもはるかに大きなたらいを頭にのせて、家と井戸の間を何往復もしている姿があった。学校には行っていないのだろうか、子どもらしく遊ぶ時間はあるのだろうか……その光景は、清潔な水がいつでもふんだんに使えるという私の感覚が思い込みにすぎなかったことを教わるには十分だった。現地の人に聞いた話では、トイレの整備も間に合っておらず、川が排泄物で汚染された結果、コレラや赤痢などの感染症で毎年多くの人が亡くなっている。その中で割合は幼児が特に高いとのことだった。

昨年のボランティアはネパールに行った。ある山あいの集落を訪ねたとき、集落から山の高いところに向かって延々とパイプが通されているのを見た。ヒマラヤの雪解け水を、何キロも先から引いているパイプだという。ヒマラヤの天然水なんてうらやましい、と私は無邪気に思ってしまったが、供給量の少なさやパイプの維持管理にかかる手間、コストなど、問題は尽きないとのことだった。「子どもの頃はまだこのパイプが

なく、山をいくつか越えた水場まで、歩いて水を汲みにいかなければならなかった」と話してくれた中年女性。その頃よりはよくなったとはいえ、蛇口をひねるだけで水が豊富に流れ出す日本では考えられない話だった。

「安心できる水を安定して手に入れられるのは、日本をはじめとした一部の国だけの常識にすぎない」これが海外での体験を経て私が痛感したことだ。では私に何ができるのだろうか。帰国して、家族とも話し合ってみたが、「食器洗いや歯磨きのときはこまめに水を止める」「使用後の油は流さず固めて捨てる」「シャワーは本来に必要な時だけ使う」そんなどこにでもあるような案しか浮かばなかった。しかし大切なのは、何か特別なことをするのではなく、できることを確実に行っていくことだ。そう思い直して今、実行している。皆がそうすることによって、「できること」の範囲も広がっていくのではないかと思っている。私たちがこの美しい「水の星」を守り続けるのだ、という強い意志を持って。

【審査員からの一言】

現地に行ったから分かることやその時の高橋さん自身の気持ちがとても具体的に丁寧に書かれていて、魅力的な作文でした。全体の構成も工夫されており、バランスの良い文章になっています。

この美しい「水の星」を守り続けるためにも、高橋さんの貴重な経験と感じたことを、ぜひ周知してほしいと思います。

私学協会理事長賞

豊かな自然を、つなぐバトン

東海大学付属静岡翔洋高等学校 中等部

一年 ^こな^がい ^らら ^ら
小長井 麗來

「雨が降らない」そのことがこれほどまでに恐ろしいことだとは、去年の秋までの私は想像もしていなかった。

十一月から一月にかけて、私達の静岡県は記録的な少雨に見舞われた。平年の三分の一以下の降水量しかなく、一月は県内各地でほとんど雨が降らない日々が続いた。いつもは豊かな流れをたたえている安倍川でさえ、「瀬切れ」が起きたというニュースを聞き、私は言葉を失った。蛇口をひねれば当たり前に出てくる水は、空からの恵みと、それを蓄えられる自然のサイクルがあつて初めて成り立つものなのだ。

恵まれすぎているがゆえに忘れてしまいがちな、一滴の重み。この冬の渇水体験は、私に「水と人との関わり」を根本から問い直させてくれた。

この異常な少雨は、私の家の中にも目に見える変化をもたらした。例年の冬なら、朝起きると窓ガラスはびつしよりと結露で曇っている。しかし、そんな光景はなかった。受験生の私は、体調管理には気を使っていた。特に感染対策として、加湿器をフル稼働されていたが、それでも湿度は三十％程。空気がカラカラに乾ききっているのを肌で感じ、喉の痛みが続く日々だった。外に目を向けると、玄関前の景色も一変していた。冬の朝は夜露が降りて道路もほどよく湿っているため、水まきをする必要はない。だが違った。雨だ

けでなく夜露さえ降りない日が続き、風が吹くたびに砂ぼこりが舞い上がる。ついに母は、冬の水まきを始めた。

「本当は毎日やりたいけど、三日に一度。このまま雨が降らなくて、枯渴したら困るから」

母がそう言った時、私はハッとした。単に今使う水が「もったいない」というだけでなく、もっと先の未来私達の生活を支えるダムや水源が涸れ果てることを心配していたのだ。

水は自分の意志とは関係なく、天候や環境によって「使いたくても自由に使えない状況」になり得るのだと、身をもって知ることになった。調べてみると、私達の生活を支える静岡の豊かな水は、富士山や周辺の山々に降った雨が長い年月をかけて地下を通り、蓄えられたものだという。しかし、今回のような異常気象が続けば、その蓄えもいつかは底をつくかもしれない。母が感じていた不安は、私達が向き合わなければならぬ現実なのだ。水は「今、ここにあるだけ」のものではなく、水源地を守る人々や、自然のサイクル、そして私達利用者の常識ある行動によって、未来から借りている大切な資源なのだと強く感じた。

この冬、カラカラに乾いた窓がガラスや砂ぼこりの舞う玄関を見て感じた不安を、私は忘れたくない。水不足は決してニュースの中だけの出来事ではなく、私

達のすぐ隣にある危機なのだ。私はこれまで、蛇口から出る水を「無限にあるもの」と思い込み、無意識に使ってきた。しかし、母が先々の事を考えて水まきを控えたように、私もこれからは「今さえ良ければいい」という考えを改めたい。

具体的な提案として、私はまず「水の向こう側」を想像することを習慣にしたい。一滴の水が長い時間をかけて私の元へ届いた旅路や、それを支える水源地の方々の努力に思いをはせる。そうすれば出しっぱなしのシャワーや、無駄に使ってしまう水が、とてももったいないものに感じられるはずだ。

静岡の豊かな自然が、これからも夜露を降らせ、川を潤し続けてくれるとは限らない。だからこそ、私はこの冬の渇水を「警告」として受け止め、大切に水を使うという「当たり前前の責任」を果たしていきたい。それが、この豊かな静岡の水を次の世代へとつないでいく、私の一步になると信じている。

【審査員からの一言】

生活の中で感じたことやそこから気付いたことが文章として良く表現されていて、この冬の乾いた空気が伝わる良い文章でした。

天候や環境は個人では変えられませんが、水の向こう側を意識する小長井さんのこれからの取り組みを楽しみにしています。

入賞

私達が「食べている」水

沼津市立門池中学校

二年 佐々木 菜結華

朝起きて顔を洗い、コップ一杯の水を飲む。私達の毎日は、あたり前のように「水」に支えられている。日本に住んでいると、蛇口をひねればいつでもきれいな水が出てくるのが当たり前すぎて、これまでは「出しっぱなしにしない」という程度の節水ができれば十分だと思っていた。けれど、この作文を書くために調べていくうちに、私の目には見えない場所に、とてつもない量の「隠れた」水があると知って、驚いた。

その正体「バーチャルウォーター」というものだ。これは、食べ物や製品が作られるまでに、どれだけの水が使われたかを計算した数字のことらしい。例えば、私達が好きな牛丼一杯。これを作るのに必要な水は、なんと約二千リットルだという。お風呂の浴槽に換算すると、およそ十杯分もの水が、たった一杯の牛丼の中に隠れていることになる。牛が飲む水だけでなく、その牛が食べる大量のトウモロコシなどを育てるために、とんでもない量の水が使われているのだ。水は姿を変えて、あらゆる場所に存在している。私達は一日中、蛇口から水を飲むだけでなく、食べ物や服を通じて、大量の水を使い続けているのだ。

さらに驚いたのは、その「隠れた水」の多くが、海外から来ているということ。日本はたくさんのお食料を輸入している。それはつまり、世界中の水不足に悩んでいる国々から、彼らにとって大切な「命の水」を、

形を変えて分けてもらっていることになる。それなのに、これまでの自分はどうかだっただろう。

思い返してみると、恥ずかしいことばかりだった。

夕飯のおかずを「もうお腹がいっぱいだから」と簡単に残して捨ててしまった。そんな何気ない行動の一つ一つが、実は世界の誰かが必死で守っている「命の水」を無駄にしているのと同じだったと気づいた。また、買い物でも「安いから」という理由だけで、すぐに飽きてしまうような服を買っていた。ジーンズ一本作るのにも、一万リットルもの水が使われるなんて想像もしていなかった。自分の「便利」や「欲しい」という気持ちの裏側で、誰かの命に関わる水が削られているかもしれないなんて、考えたこともなかった。

このことを知ってから、私の生活は少しずつ変わった。一番の変化は、目の前にある食べ物や物を見るたびに、「これが届くまでに、どれだけの水が旅してきたのだろう」と考えるようになったことだ。「水が命を守る」という言葉は、最初はどこか遠い国の話のように聞こえていた。でも今は違う。人間は水がなければ数日も生きられない。その大切な水を、私達は世界の誰かから「借りて」生きている。だからこそ、ただ蛇口を閉めるだけじゃなくて、目の前の食べ物や物を最後まで大切に扱うこと。それが、水を分けてくれている世界中の人たちに対する、ルールだと思う。

私の体は、世界中の水でできている。今日食べたものも、今着ている服も、すべてはどこかで誰かの命を支えている水のおかげだ。これからは「いただきます」という言葉に、食べ物を育ててくれた「見えない水」への感謝も込めたい。目に見えないコップ一杯の重みを忘れずに、一滴の水を大切にできる大人になっていきたいと思う。

【審査員からの一言】

バーチャルウォーターを通して、私達の周囲の物に大量の水が関わっていることを考えさせてくれる良い作文でした。大切な水を「借りている」という発想は、とても興味深く、考えさせられます。

このバーチャルウォーターを知った佐々木さんが、今後どのように隠れた水を守っていくのかを楽しみにしています。

水の週間記念作文コンクールについて

「水の週間記念作文コンクール」は、水の週間（八月一日～七日）の啓発行事として昭和五三年度から始まりました。四九回目となる令和八年度は、次のとおり開催しました。

◆主催 静岡県

◆後援 静岡県教育委員会

公益社団法人静岡県私学協会

◆主旨 次の時代を支える子どもたちが、水の大切さや水環境を守ることの意味について考える機会とし、水と人との望ましい関係を築くためのきっかけづくりになることを目指す。

◆テーマ 「水について考える」（題名は自由）

◆対象 静岡県内の小中学生

◆応募規定 小学生：四〇〇字詰め原稿用紙三枚以内 中学生：四〇〇字詰め原稿用紙四枚以内

※応募作品は、自作の未発表のものに限る。

また、版權は主催者に帰属する。

◆募集期間 令和八年一月二十日～五月八日

◎事前審査

応募作品について、静岡県くらし・環境部環境局水資源課による事前審査を行いました。

◎審査会審査

事前審査を通過した作品について、審査会（令和八年五月二十八日）で最終審査を行いました。

審査した結果、小学生の部五編、中学生の部六編の受賞を決定するとともに、中学生の部五作品を「全日本中学生水の作文コンクール」（国土交通省ほか主催）に推薦しました。

推薦した結果、牧野 翔様の作品が「全日本中学校長会会長賞」、縣 ひかる様の作品が「入選」に選出されました。

（審査員 敬称略）

中村 ともえ 静岡大学教育学部准教授（国文学専攻）

小松 幸子 NPO法人グラウンドワーク三島理事長

剣持 万枝 生活の森グループ清水代表

橋本 ひろ子 元小学校教員

細井 道浩 県教育委員会事務局義務教育課教育主査

望月 良英 静岡県くらし・環境部環境局水資源課長

◎表彰

・賞 知事賞、教育長賞、私学協会理事長賞、

入賞（賞状、副賞を授与）

※校内参加を含め、応募者全員に参加賞進呈

・表彰式 令和八年八月三日、静岡県庁にて開催

御参加いただいた小・中学生の皆様、そして御協力いただきました先生方に、厚くお礼申し上げます。

このコンクールは、来年度も同様に開催する予定です。たくさんの方の御応募をお待ちしております。